【報告】
鹿児島大学医学部保健学科紀要
30(1)：31–38，2020

2019年度　大学の世界展開力強化事業学生派遣報告

―米国 Berea College との交流を通して―

田中一枝[1)]，米増直美[2)]，八代利香[3)]

和文要旨

2019年度大学の世界展開力強化事業として，米国 Berea College に学生６名が引率教員２名とともに派遣された。事業のテーマは，異文化理解，グローバルリーダーシップ，ルーラルナーシングである。米国での学生交流と現地視察を通して，学生は米国のへき地におけるルーラルナーシングについて学び，グローバルな視点でローカルな活動を行うことの重要性について考察することができた。今後の課題として学生が国際的な交流を続け，看護職になってからも自分のフィールドでグローバルな視点を活用していくこと，および教員のグローバルな教育への対応能力の向上が挙げられた。

キーワード：ルーラルナーシング，国際交流，看護教育，米国，ヘルスケア

はじめに

鹿児島大学は，平成30年度「大学の世界展開力強化事業」に採択された。本事業は鹿児島をアジアの玄関口として，米国とアジア諸国の大学の三極連携を構築し，オンライン協働学習（COIL: Collaborative Online International Learning）等によって，世界的な課題や地域社会の持続可能な発展に取り組むことを目的としている。米国，アジア諸国の大学との三極連携により協働で教育研究を行う課題解決型リサーチ・プログラム（上級）において，「文明と生態」分野の「島嶼へき地医療」コースを医学部が担っている。

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻では，部局間学術交流協定校である韓国の中央大学校赤十字看護大学とのこれまでの鹿児島大学学生海外研修支援事業を活かしながら，米国の Berea College を含めた三極連携を構築し「COIL 事前学習＋コース専門性に地域リソースを活用した実地体験＋日本人学生と協働学習」を実施している。平成30年度の「看護教育学」に引き続き，令和元年度は「国際看護学」の講義科目として事業に取り組んだ。事業のテーマは，異文化理解，グローバルリーダーシップ，ルーラルナーシング，である。学生は４月に同科目で COIL を修了し，６月には韓国と米国から６名ずつの学生と１名ずつの教員の計14名を受入れ，本学で学生交流プログラムを実施した。

今回，本専攻の６名の学生と２名の教員が2019年９月１日から９月11日までの11日間，米国の Berea College に派遣され，現地学生との交流プログラムを実施した。研修目的は２つあった。１つ目はルーラルナーシングの理念や変遷について理解し，離島・へき地におけるヘルスケアや看護の現状および看護師に求められている役割について学び，諸外国の現状を理解し説明出来ることであった。２つ目は，米国でへき地を含めた地域の保健医療関連施設の見学を通して，日本国内のへき地医療の現状や看護のあり方をグローバルな視点で再認識し，看護全体のあり方や課題を考察する力を強化することであった。これらの体験や議論を通し，学生は，我が国のへき地医療の現状や看護のあり方を再認識するとともに，グローバルな視点でローカルな活動を行うことの重要性に

1) 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻 成育看護学講座
2) 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻 地域包括看護学講座
3) 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻 基幹看護学講座
連絡先：田中一枝
〒890-8544　鹿児島市桜ケ丘8丁目35-1
Phone/FAX：099-275-6792
Email:k-tanaka@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

表１　2019Berea College Department of Nursing Kagoshima University Exchange Itinerary

Day	Time	Program
Sun. 9/01	9:47p 11:00p	Arrival at Bluegrass airport Arrival at Boone Tavern
Mon. 9/02	10–11:50a	Take a class in Berea College What do community Health Nurses actually do? Public Health Nursing Intervention Wheel
	12–12:50p	Meet & Greet
	1:30–3:30p	Tour Visitor Center & Shoppe-Campus Historical Tour/Student Crafts
	3:30–4p	Child Development Lab & Ecovillage
	4:30–6:30p	Dinner
Tues. 9/03	9–9:45a	Tour Baptist Health
	12–12:45p	Lunch
	1–2p	Post conference
	5–7p	Welcome Party
Wed. 9/04	8:00a	Madison County Public Health Department
	11:30–12:30p	Lunch
	12:30–3:30p	Berea College Forestry Outreach tour & hike
	6–8p	Dinner
Thurs. 9/05	7:30a–3p	Frontier Nursing tour
	7p	Dinner
Fri. 9/06	10–11a	University of Kentucky ,Lexington Pav-A
	6:30p	Kentucky Legends Baseball game
Sat. 9/07	10a–2p	Old Town- Touching culture
Sun. 9/08	10–12	Hike the Pinnacles
	12–3p	Cooks in the kitchen
Mon. 9/09	11–11:50	Presentation from KU students
	12–1p	Lunch
	1–2p	Nursing Simulation practice
	5–7p	Good-bye potluck
Tues. 9/10 Wed. 9/11	3:30a	Departure from Berea

ついて考察することができた。本稿では，米国での学生交流プログラムに関する準備と成果，研修を通しての課題について報告する。

1. 派遣の事前準備について

事前準備ではまず，派遣学生の選抜が行われた。４月に国際看護学を履修している学生の中で希望を募り，その中から英語での集団面接と学びたいことについてのレポート提出を踏まえ，６名が選出された。選出された６名の学生と共に，派遣されるまでに事前学習を行うことを今回の新たな取り組みとして行った。事前学習の目的は，医療制度や保健に関する知識を深め議論できる力を身に着けることと，プレゼンテーションの準備を行うことであった。１ヵ月に２～３回を目安に10回にわたり課外学習会を開催し事前学習を行った。

事前学習は「健康の社会的決定要因」[1)]を用いて日本における医療制度や健康問題について調査し，英語で書かれている医療ニュースを和訳した内容を持ち寄って，ディスカッションを行った。教員は学生のディスカッションに同席し，追加意見や助言を行った。学生は４月の COIL により，相互の看護教育や医療制度についてディスカッションを行っていたため，プレゼンテーションの内容は，①鹿児島県の紹介，②鹿児島大学の紹介，③日本の保健医療に関する課題，④日本の医療保険制度とし，英語で行えるよう事前準備を行った。プレゼンテーションは，内容の確認と英語表記について教員が適宜指導し，学生が修正を行った。

2. 現地学生との交流プログラムの実際

今回の学生海外派遣は，表１に示す日程で実施された。本稿では，看護学生の授業の聴講とプレゼンテーション，病院見学，保健所視察，母性・小児の訪問看護の歴史視察について報告する。

1）Berea College の概要

Berea College は，1855年に設立された米国南部で最初

の異人種間の男女共学のリベラルアーツカレッジである。2019年現在，1,600人の学生と130名の教員が在籍している。また，米国でわずか９つの連邦政府に認められたワークカレッジの一つで，学生は授業料を支払う義務が無く，４年間で約10万ドル相当の授業料保証奨学金を受け取ることができる。学生教育には，学問と労働の要素が含まれており，大学内での様々な職種の労働を行うことが定められており，学生は週に10～15時間の労働を行っている。卒業時には32の専攻で文学士号および理学士号を取得できる[2)]他，学問と労働の両方の成績証明書が交付される。

今回，現地学生によるキャンパスツアーに参加した。敷地内に図書館，映画館，ホール，体育館，講義棟等を有しており，キャンパスは１つの町を形成しているような広大さであった。敷地内には保育園も設置されており，今回見学することができた。保育園の利用者は教職員や学生であり，働いているスタッフにも学生が含まれていた。保育園でスタッフが大事にしている子どもへの関わり方は，脳への発達を促すために，子どもに対して安易に答えを教えるのではなく，“Find out it !”と声をかけ自ら考え答えを導き出せるような関わりをしているとのことであった。

(1) 講義およびプレゼンテーション

看護学科４年生の Community Health Nursing の授業に参加した。４年生は15人程度であり，授業の内容は「公衆衛生看護学の介入と役割について」で，予習をしてくることが受講の参加条件となっていた。スライド毎に学生から質問があったり，教員からの質問に学生が答えたりと意見交換が活発に行われ，最後には日本の公衆衛生看護との違いや共通点をテーマとしたディベートが行われるという，アクティブラーニングの授業であった。日本の学生はその授業形態に圧倒されていたが，学生の積極性や得られる学びの違いを実際に体験できたことに感銘を受けていた。

本学学生は別日にプレゼンテーションの機会を得た。英語でプレゼンテーションを行い，鹿児島県の紹介や日本の死因について，日本の若者に多くみられる自殺の問題や，少子高齢化に伴う医療保険制度の問題等について紹介した。ケンタッキー州は海に面していないため，現地学生は，離島での海の様子に感動したり，有人離島の数に驚いていたりと鹿児島の離島について興味深く聞いている様子であった（写真１）。日本とアメリカの医療制度の違いについて学生自身が気づき，日本の制度の利点や欠点を紹介した。現地学生は，少子高齢化等について同様の問題を抱えていることに気づいていた。発表を終えた後，現地学生とのディスカッションを通して同じ

写真１　鹿児島大学の学生のプレゼンテーションの様子

ような問題を抱えている中で自分たちが看護職としてできることは何か等について意見を交わし，志を共にすることができた。

(2) シミュレーション演習

Berea College には看護技術を習得するための演習室とシミュレーション教室が備えられていた。演習室には，様々な人種のモデル人形が置いてあり，多国籍文化を感じることができた。シミュレーション教室は実際の病室のようになっており，マジックミラーの向こうでシミュレーターを操作できる部屋が設置されていた。そこではシミュレーターのいくつもの症例パターンを選ぶことが可能であり，患者のバイタルサインが変化し，咳嗽症状等の様々なリアリティーのある症状を表現させることができた。また看護者が人形の脈拍を測定したり，肺音を聴取したりした時点で，何を行ったのかが操作部屋で表示されるシステムになっており，患者の何を確認したのかが部屋の外からでも分かるようになっていた。シミュレーターの近くにはカメラが設置されており，看護者が患者にどのような声掛けをしたのかまで把握できるようになっていた。ここで学生は週に数回，症例を変えて，臨床現場と同じような状況下で看護診断の授業を受けていた。また、学生自身でフィジカルアセスメントを用いた看護診断や看護技術の場面を，実際を模して行うとのことであった。臨床現場と同じような状況下で授業が行われているため，実際との隔たりが少なく，学生は看護師としての責任感を持って看護診断やケアの技術を身に着けることができると感じた。本学の学生も臨場感あふれるシミュレーション演習を体験し，自分たちが学んできたフィジカルアセスメントを実施することで，実践できた部分と不足している部分に気が付くことができた。また，臨床での実践につながる臨場感のあるシミュレーション教育の重要性について考えることができた（写真

写真２　シミュレーションの様子

写真３　Baptist Health の前でスタッフの皆さんと看護学生と記念撮影

２）。

2）病院見学

２か所の病院を訪問し，見学を行った。１か所は Baptist Health という地域に根差した病院であった（写真３）。その病院では現地学生が産婦人科病棟で実習を行っており，本学学生も現地学生と共に病棟内を見学したり，病室を訪問したりした。現地学生たちは１週間に１日のペースで病院実習を行っている。学生はその日受け持った患者の状態についてアセスメントシートを用いて情報収集を行い，ケアを実践していた。

病院見学をする中で日本の病院との違いがいくつか見られた。病室は広く，それぞれの病室に記録のためのパソコンが置いてあり，看護師がパソコンを持って回るのではなく，病室でその都度記録を記載していた。分娩室には，担当看護師や担当医師が本日のプランなどを記載し，情報を共有するためのボードがあり，緊急事態に備え，患者を含め誰でも一目で情報共有ができるようになっていた。機材にも違いがあった。分娩は無痛分娩が多いため予め硬膜外麻酔ができるような輸液ポンプが設置してあったり，薬剤管理に関しては非常に厳重な管理を行うため，指紋認証で内服薬が管理されたりしていた。日本では指紋認証システムは取り入れていないことを現地スタッフに告げると，薬剤が盗まれたりしないのかと看護師から尋ねられた。そもそも日本では盗まれるという概念が薄く，信頼感が強いことに学生は気づき，アメリカの臨床現場を目の当たりにすることで，日本との様々な違いは，文化や医療制度の違いから生まれているということを学んでいた。また，その地域での妊産婦の問題はドラッグの使用であり，それら妊産婦のケアには継続的な支援を必要とするため，ソーシャルワーカーを通した地域の保健所との連携が欠かせないとのことであった。

もう１か所の University of Kentucky Health Care は，ケンタッキー州に位置し，9,000人以上の雇用者が働いている大規模な大学病院であった。University of Kentucky とも隣接しているので職員や学生のための保健施設があり，ナースプラクティショナー（NP：Nurse Practitioner）が常駐し，体調不良時に利用できるとのことであった。施設内には，日本ではではあまり馴染みがない様々な施設が備えられていた。例えば，Health Education Center という，どんな人でも治療や薬剤のことを検索できるような部屋や，ドナー提供者の名前が張ってあるモニュメント，どの宗教の方々にも対応ができるような祈りの部屋があった。病院施設内においても文化の多様性を感じ，本学学生が学びを深める機会にもなった。

3）Madison County Public Health Department

Madison County Public Health Department は，日本における保健所，市町村保健センターにあたる施設である。ここでは，家族計画，HIV 検査，予防接種，学校歯科プログラム，性感染症検査，女性・乳児・子どものための特別補助栄養プログラム，子どもの発達支援や妊婦・褥婦の支援が行われていた。また，病院のソーシャルワーカーと連携し，医師の指示のもとに訪問看護が行われるなど，地域住民の健康を保持増進していくための様々な取り組みがなされていた。住民が様々な保健サービスに自らアクセスできるようにするために，フェイスブックで呼びかけたり，リーフレットを用いたりと，利用しやすいような環境づくりや、利用促進のための働きかけが行われていた。

今回は，地域で住民を支えるための活動について具体的に話を聞くことができた。ここで働く NP が大切にしている３つのことは，① Policy（訪問看護や健康教育），② Education（School Nurse との連携など），③ Build

Environment（コミュニティーバスの設置や横断歩道の整備等），であった。また，その地域での健康問題は，鎮痛剤の麻薬投与のための注射器の使いまわしによる感染症の蔓延であった。そのため，地域住民に教育を行い，針の交換や廃棄の仕方などを説明していた。しかし，住民は警察に通報されること等への恐れから，積極的に利用することが少ないため，対象者から信頼されるような取り組みであったり，感染症の予防接種が無料でできるようなサービスを提供したりしているとのことであった。その他の取り組みとして，消防署や警察署，School Nurse と連携して子どもたちへの安全教育（交通安全や防災訓練，化学兵器やテロが起きた時の対応など）や，安全への環境づくりや未成年の飲酒の防止を図るシステムづくりなどが行われていた。

4）Frontier Nursing University

Frontier Nursing University は，もともとは助産学を教える Frontier 大学院として，Mary Breckinridge によって1939年に設立された大学である。看護師である Mary Breckinridge は，同僚と馬に乗って，ケンタッキー州の農村地域であるアパラチア山脈で出産する女性のケアや訪問看護を提供した（写真４）。Frontier Nursing University には農村の女性と家族のヘルスケアを改善するために看護助産師をヘルスケアの中心と考え，教育するというビジョンがあった。助産師教育を開始し，ヘルスケアの選択肢がより複雑になる1960年代後半からは，看護師がすべての家族に包括的なプライマリケアを提供するために家族看護教育を導入するなど[3]，創始者の思いや信念を感じることができた。今回は，実際に Mary Breckinridge が利用していた施設や，住んでいた家などを見学する機会にも恵まれた。ケンタッキー州における助産学や家族看護学の歴史を感じるだけでなく，へき地の舗装されていない山奥の道を馬で進み，対象者の家を一軒一軒訪問したという姿から，看護の先人の地域に根差した看護を提供するという誇りと情熱を感じることができた。

3. 研修を通じての学生の学び

研修後に提出された学生の報告書から，以下の学びを確認した。

1）アクティブラーニングの大切さ

本学学生は，聴講した講義において，ディベート形式での授業や，学生からの意見や質問が活発に行われるアクティブラーニングの授業を体験することで，日本との違いを感じていた。予習を行い，講義の途中でも質問をする現地学生の姿をみて，アクティブラーニングの本質を感じ取っている様子であった。

写真４　Frontier Nurse の銅像

2）国際間の違いから学ぶ看護及びルーラルナーシング

研修に参加するにあたり，本学学生は日本や鹿児島の医療・保健事情について学習をしていたため，現地での体験を通して，その違いについての学びが深いものとなった。実際の病院や地域の保健施設を見学したことで，地域で活躍するナースプラクティショナーの働きや，考え方に触れることができた。ナースプラクティショナーの役割について学生は再認識し，同じ看護職として自らの知識や技術を高める必要性や，地域住民へ関わる時の姿勢等に学ぶことができた。病院と地域が連携する重要性は日本で行われているルーラルナーシングと共通している部分がみられた。また，地域での健康問題はその土地の文化や宗教にも関連していることや，医療制度が国により異なること，米国のヘルスケアを支える地域看護の特色や，互いの国の地域看護の優れた点等にも気づくことができた。また，互いの国の看護教育を捉え，より良くしていくための改善点などに気づき，積極的に学ぶ姿勢が見られた。

本学学生は高度なシミュレーターを使った，より実践的な演習に大いに刺激を受けていた。実際の患者を想定して対応しなければならない状況に，学生は自らの知識や技術の不足を痛感していた。また，モニターに頼るだけではなく，触診や視診のフィジカルアセスメントで患者の症状を見極め，患者の訴えをしっかり傾聴する，という看護の本質に関しては，国による違いはないことを学んでいた。米国の看護や文化に触れることで，日本の看護についての理解が深まると共に，「当たり前」として存在していた日本の文化について，実は見えていな

かったり知ろうとしていなかったことに気づくきっかけともなった。

3）グローバルに活躍するために必要な能力

今回の研修を通して本学学生は，自分の考えをしっかりと持ち，その意見や考えを表現することの重要性を認識していた。現地学生との交流の中で，学生は自分の意見を聞かれることが多く，答えられないでいると，討議する機会を逃してしまうことに気づいていた。様々なことに好奇心を持ち疑問に思うことや，意見を主張することで相手との意見交換ができ，相互理解が深まることを学んでいた。一方，自己開示・自己表現の難しさを実感するだけでなく，相手の意見を聞き，分かり合えた時の喜びを感じることができていた。相手を尊重し，思いやりと敬意を払うこと，相手の発言を受け入れることで，お互いの尊厳を守りよりよい関係づくりができることを学んでいた。それらは，看護職にとって必要な能力であり，グローバルに活躍する際に必要となる能力でもある。

4）グローバルな視点でローカルに活躍すること

今回の研修を通し，世界の動向を捉えることで，日本の状況を広い視点から捉えることができることも学生は学んでいた。海外の看護や医療事情を学ぶだけでなく，そのことで日本の良さや改善点について学ぶことができる。海外で学んだことを日本に持ち帰り，他国の良さを取り入れ，自国のルーラルナーシングを発展させていくことを学んでいた。さらに自国の問題点のみに目を向けるのではなく，自国の良さにも気づき，それを強みにしていくという視点を養うことができた。そうすることで，他国の人々もまた私たちの取り組みを参考にし，共有していくことができる。グローバルな視点を持ち、ローカルに活躍できるために，相互理解を深めることと，改めて自らの地域や活動を振り返り，発展させていくことのできる能力が必要である。

4. 今後の研修に向けて

1）研修の成果

今回の研修において，教員自身も，他国への理解を示し自国への理解を深めることができる視点を養う学生教育について認識を新たにすることができた。国際的に活躍できる人材を育成するためには，教員が看護におけるグローバル化を経験的に理解し，国際的に視野を広げる必要性があり[4]，今回の研修では，そのための示唆を得ることができたと考える。今後はこの事業が継続し発展していくための教育活動や，グローバルな共同研究等の活動が必要となる。

事前準備では，日本の保健医療や健康問題について理解を深めるために，COIL で行った内容を踏まえてそれぞれ自己学習を行い，その後意見交換を行った。それらをもとに研修先でのプレゼンテーション資料を作成することができたことは，改めて日本の看護や医療について考えを深める機会になったと考える。

看護学部生が異文化受容に必要だと思うスキルには，「相互向上のための対象理解と自己開示」や「異文化看護を実践するためのスキル」などが必要である[5]，との報告がある。本学学生は，現地学生が歓迎してくれたり，現地を案内してくれたりする中で，相手のおもてなしの心を感じ，自分たちのことを理解してくれようとする気持ちを嬉しく感じている一方で，始め英語がうまく話せないことで自己開示することがなかなかできず，自ら発言したり質問ができなかった。対象を理解しようとする気持ちがあると相互理解につながるが，コミュニケーションに欠かせない言語の問題で学生は戸惑っていた。看護学部生の異文化受容には「相互理解のためのコミュニケーション能力」が必要で「一般的な言語力」「コミュニケーション能力」「発信力」「表現力」「理解力」[5]が求められる。言語力や，積極的に討論できるような発信力，表現力を身に着け，コミュニケーション能力を高め，自信をもって海外派遣研修に臨むことができるようなレディネスを整えていく必要がある。COIL 事業における他国の看護学生との交流を通して，対象理解や自己開示ができるスキルを養い，これまで学んできた授業を振り返る機会を設けて自国の看護への知識や技術を確実なものにすることで，グローバルリーダーシップの素地を形成することができると考える。

2）今後の課題

今後の課題として，２つ挙げられる。１つ目は，今後も国際的な関わりをもっていくことと，今回の交流をきっかけに学んだグローバルな視点を看護職になってからも自らのフィールドで活用していくことである。

また，２つ目に教員の国際力がある。カルデナスら[6]は，看護学教育の質を保障しながら，国際交流活動を展開していくには，国際的視点をもった対象理解に関する教育ができる教員，十分な外国語能力のある教職員の確保，また現在国際交流を担当している教職員の外国語学習環境づくりが求められる，と述べており，教員の語学力向上を含めた国際的視点の研鑽と，国際交流に参加する機会を得ることで，国際的な人材育成への意欲を高めていく必要がある。人材育成を行う教員自ら，国際力を高める向上心をもち，グローバルリーダーシップを担う学生育成への基礎づくりを固めていくことが求められる。

文献

1）Richard Wilkinson and Michael Marmot：The Solid Facts 2nd edition 日本語版，特定非営利活動法人健康都市推進会議，2004

2）Berea College ホームページ：https://www.berea.edu/，〈最終アクセス2019.11.27〉

3）Frontier Nursing University ホームページ：https://frontier.edu/，〈最終アクセス2019.11.27〉

4）山口さおり，稲留直子，八代利香，新地洋之：学生海外研修における大学教員の役割と今後の課題，鹿児島大学保健学科紀要，2016；26(1)：73–81

5）井川由貴，長坂香織：看護学部生の異文化受容に関する現状と課題～ A 県立大学看護学部のグローバル化推進に向けた教育への一考察～，山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究ジャーナル，2019；5：13–27

6）カルデナス暁東，西頭知子，月野木ルミ，他：日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する調査，大阪医科大学看護研究雑誌，2013；3：147–156

Participation Report for the Inter-University Exchange Project in 2019 —Through Exchange with Berea College—

TANAKA Kazue[1)], YONEMASU Naomi[2)], YATSUSHIRO Rika[3)]

1) Division of Reproductive Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
2) Division of Community-based Comprehensive Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
3) Division of Fundamental and Clinical Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University

Address correspondence: TANAKA Kazue
8-35-1, Kagoshima City,890-8544, Japan
Phone/FAX +81-99-275-6792
Email k-tanaka@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

The project initiated by Kagoshima University in 2019, titled "Inter-University Exchange Project" included six students and two faculty members who visited Berea College in the United States of America. The theme of the project was Cross-Cultural Understanding, Global Leadership, and Rural Nursing. Through this exchange, that included an on-site inspection, the six students learned about rural nursing care in a remote area of the United States and discussed the importance of local activities from a global perspective. Future challenges are discussed as follows; students continuing international exchange and activities to incorporate a global perspective when becoming a nursing professional, and faculty members improving their abilities to teach nursing from a global education perspective.

Keywords: Rural nursing, International exchange, Nursing education, Healthcare system, United States of America